

高校日本史におけるジェンダーフリー教育の課題を求めて

～平塚雷鳥のエッセイをめぐる生徒の意見をてがかりに～

玉谷直子

はじめに

本校では、現在3年生で必修の「日本史A」を開講している⁽¹⁾。そのため、日本史を受験科目としない生徒にとっては、教科書を丁寧になぞるような授業は辛いようである。そういった事情もあり、必修の「日本史A」では、日頃から生徒自身に考えてほしいテーマを投げかけるような授業を心がけている。また、定期テストの際に、テーマにそって意見を述べるような出題をすることがある。テストで意見を述べさせることは、生徒の学力を確認するためだけではなく、今後の授業をどの様に組み立てていくべきかの指針を得るためにも有効であると考えている。

今回は、ジェンダーフリー教育に関するクロスカリキュラムを作成するという学校全体の目的に沿って、日本史の授業でジェンダーフリーについて学ぶ際の課題を確認することをめざした。題材としては、高校日本史における婦人運動の史料として最もポピュラーである平塚雷鳥のエッセイを利用した。

1. 調査の内容と方法

調査は、2段階にわたって行った。まず、二学期期末テストの一部として、平塚雷鳥のエッセイに関する意見を述べさせた。その後、全員の解答をプリントして配布し、同級生の意見に対する意見・感想を述べさせた。

以下は、期末テストの本稿に関する部分である⁽²⁾。

3. 次の史料を読み、下の問いに答えなさい。

I. 原始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。今、女性は月である。他に依^よって生き、他の光によって輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。偕^きてこゝに「(A)」は初^{うぶごえ}声を上げた。現代の日本の女性の頭脳と手によって始めて出来た「(A)」は初声を上げた。…中略…私共は隠^しされて仕^ま舞った我が太陽を今や取戻さねばならぬ。…中略…自由解放！ a. 女性の自由解放と云ふ声は随分久しい以前から私共の耳^{みみ}辺にざわめいてゐる。併^{しか}しそれが何だらう。思ふに自由と云ひ、解放と云ふ意味^{はなはだ}が甚だしく誤解されてゐはしなかつ [た] らうか。…中略…私の希^{ねが}ふ真の自由解放とは何だらう。云ふ迄もなく潜^{ひそ}める天才を、偉大なる潜在能力を十二分に発揮させることに外^{ほか}ならぬ。

- (1) 文中の空欄A～Cに当てはまる語句を答えなさい。
- (2) 史料I・IIを著した人物を答えなさい。
- (3) 文中の下線部aに関して、当時、「女性の解放」という言葉は、多くの人々にどのように理解されていたと考えられるか、答えなさい。
- (6) 史料Iを読み、著者の考え方に対するあなたの意見を述べなさい。

問い(6)の解答が本稿での第一段階の分析対象である。使用する語句の指定などを一切しなかったの
で、知識が不足していても答えられる設問である。しかし、空欄のまま提出した生徒が4名いた。ま
た、最後まで書けなかった者、極端に短い解答しか書かなかった者が合わせて8名いた。本稿では、そ
れ以外の101名の解答を分析の対象とした。分析の詳細は後述することとし、まず、その他の問いに対
する解答から見えてきた問題について述べておきたい。

問い(1)の正解は「青鞨」なのだが、正答率は30.1%であった。ただ、「青鞨社」という答えが全体の
24.8%にのぼったうえ、「鞨」を「踏」と回答したものなど誤字回答が26.7%にのぼったため、『青鞨』
に関する史料だということは、全体の80.1%の生徒が推測できたことになる。また、問い(2)の正解は
「平塚雷鳥 (らいてう、明)」であるが、全体の91.2%が正答できた。誤字回答もほとんどなかった。
授業では、第一次世界大戦前後の社会運動については、20世紀になるとさまざまな社会運動が成立し、
1920年代以降にそれらの運動が徐々に組織化されていく様子について学習したが、個別の史料には全く
触れなかった。この結果からは、『青鞨』及び平塚雷鳥、そして彼女が『青鞨』創刊号に掲載したエッ
セイが生徒にとってなじみの深いものであったことがわかるだろう⁽³⁾。

問い(3)では、女性解放運動が当時直面した困難について、問うた。史料の文脈からは雷鳥の考える
「自由解放」と当時の人々が考えた「婦人の自由解放」が異なっていたことがわかる。どのように異
なっていたと考えるかは、解釈の別れるところであり、非常に難しい設問であったと思う。しかし、先
にも述べたように、授業では婦人運動についても細かい事実は扱わなかったの、この設問に答えるた

めには、生徒は「雷鳥は自由解放をどのように考えていたのか?」「雷鳥らを批判したのはどのような立場の人々か?」「雷鳥らを批判したのはどのような考えの持ち主か?」「雷鳥の考えと対立するのはどのような考えか?」と考えていかなくてはならない。つまり、雷鳥の考えはどのような考えかを理解したうえで、さらにそれと対立すると推測される考えを答えさせることが、出題の意図であった。そのため、特に正解は用意せず、当時の雷鳥らの運動が直面した批判や誤解、その他の困難について述べてあればよいこととして採点した。

設問の趣旨に沿った解答の例をいくつかあげたい。

- ・それまで根深かった女性像の概念と比べてあまりにもはしたない主張であったため『新しい女』と嘲笑され、相手にされないか、非難の対象になるかであった。
- ・女性が今まで従うべきとされていた道徳や精神を離れて勝手に生きること。
- ・女性が社会進出をしたり、男性と同じように扱われていくことは、社会秩序を乱すものだと理解されていた。
- ・家庭、家からの解放、何にも縛られず自由な身となること
- ・単に家事や育児などの仕事からの自由を得ること
- ・女性が政治に参加し、言いたいことをはっきり言って、好き勝手に生きること
- ・地位向上などの精神的解放ではなく、家事などからの肉体的な解放と誤解された。
- ・史料Iでいう真の解放（才能を発揮させること）とちがいで、服装的なものやふるまい、教育の制限、などの（社会的よりも）精神的解放だと理解されていた。
- ・青鞥のメンバーの主張は家制度や日本特有の女性蔑視の思想からの解放を唱えていたが、国民は実際に拘留されている女性達の解放だと思っていた。

上記の解答の中には歴史的に見て必ずしも正確ではない解答もあるが、生徒の考えを知る上では興味深いものばかりであると思う。しかし、残念ながら、こうした解答はごく少数であった。ここに紹介したものでほぼ全てである。それ以外のほとんどの解答は以下のような内容であった。

- ・女性は家事をして家を守り、男性に従う様に生きていた。男性の方が女性よりも偉いという考え方が広がっていた。そのような立場を脱し、女性も自立できるようにすること
- ・男女差別をなくすこと
- ・婦人参政権を与えること

残念ながら、多くの生徒がこのエッセイの文脈を読めていなかったか、あるいは、婦人運動が行われた時代の状況や女性のおかれていた状況を理解していなかったことが明らかになった。また、このエッ

セイが雑誌の16ページにわたる長いものであるということを知ると、意外に思うようであった。つまり、『青鞥』のエッセイはなじみ深い、しっかり読んだり、その意味を考えたりしたことの少ない史料なのだろう。平塚雷鳥についても、名前は知っていても、彼女の主張などについては、ほとんど知らないのではないかと推測される結果となった。

そのため、2回目の調査に先立って、「平塚雷鳥の生涯と第二次世界大戦前の婦人運動」というテーマで、年表を作り、雷鳥の人生や、その主張、青鞥の関係者による論争の一部を紹介した。いわゆる『煤煙』事件や、母性保護論争における雷鳥の主張は、多くの生徒にとってなんとなく想像していた雷鳥のイメージとは異なっていたようで、今後の授業で扱っていきそうな手応えがあった。雷鳥が本校の前身である女子高等師範学校付属高等女学校の卒業生であったことも、興味を持つ一つの要因のようであった。ただ、3年生の3学期の大学入試センター試験後という時期であり、多くの生徒が積極的に授業に参加しているとは言えない状況であったのが残念である。

その後、第2段階の調査を実施した。まず、問い(6)の解答を、誰が書いたか解らないようにワープロで打ち、順不同にしてから、あらためてナンバリングして生徒に配布した。配布したプリントには、途中までしか書かれていないものも含めて全員分の解答を、印刷した⁽⁴⁾。生徒には、それらの意見の中から、共感できるものを3つ、印象に残ったものを2つ選ばせ、その理由を説明させた。これは、3学期の成績をつけるためのレポート扱いとしたところ、100名が提出したので、これを全て分析の対象とした。

以下では、2回の調査を通して、生徒の「ジェンダーフリー」に関する意識について分析したい。その際、歴史的思考力との関係についても考えていきたい。

2. 調査の結果と分析

a. 第1段階：期末テスト

第一段階の調査は、期末テストの際に行った。「史料I（雷鳥のエッセイの一部）を読み、著者の考え方に対するあなたの意見を述べなさい。」という設問である。特に指定はしなかったのに、たとえば雷鳥の文学的なセンスなどを扱っても良かったのだが、分析対象となった101名全員が女性の権利や地位に関する意見を述べていた。このことから、「平塚雷鳥といえば婦人運動」というイメージを生徒が持っていることがわかるだろう。分析にあたっては、生徒の考えのおおまかな傾向を知るために、2つの分類基準を設けてみた。1つは、雷鳥らの意見や運動、あるいはジェンダーフリー、フェミニズムなどに肯定的であるか否定的であるかということである。もう1つは、雷鳥らの運動を歴史上のできごととして評価しようとしているかどうかということである。ただし、今回の設問に対する解答の中に示されている言葉のみから分類したので、この分類をそれぞれの生徒の歴史的思考力に対する評価と、直接に結びつけることはできない。

1つ目の基準で分類したところ、解答のほとんどが雷鳥のエッセイをどちらかといえば積極的に評価

していることがわかった。雷鳥やその後の女性運動、ジェンダーフリー運動などに対して非常に痛烈な批判意見を書いた生徒は11名にとどまり、多くの生徒が雷鳥やその後の女性運動を肯定的に見ていた。肯定的意見が全体の約90%を占めたので、もう少し細かく分類する必要を感じたが、その前にまず2つ目の基準で分類してみた。当初は、先に述べたように歴史的意義をみつけようとして雷鳥のエッセイを評価しているかどうかという分類を試みたが、今回の調査に関する回答だけでは、この点について厳密に評価することは難しく、雷鳥が自分の同時代人ではないことを意識しているかどうかという程度の分類にとどまった。つまり、歴史上の出来事としての婦人運動についても意見を述べているか、あるいは現在のジェンダーフリーをめぐる動きについてのみ意見を述べているかという分類になっている。この結果、なんらかの形で歴史的な視点から女性運動に関して述べた意見が65、ジェンダーフリーをめぐる動きについてのみ述べた意見が36あった。

2つの基準による分類を重ねると、A：歴史的評価を目指しかつ肯定的な意見、B：歴史的評価をめざしかつ否定的な意見、C：歴史的評価をめざさずかつ肯定的な意見、D：歴史的評価をめざさずかつ否定的な意見の4つのグループができる。数の上では、Aに分類できる意見は63、Bは2、Cは27、Dは9であった。ここで、A～Dのグループに分類した中から、典型的な意見をそれぞれ紹介したい。なお、便宜上、本稿で紹介する意見には、紹介した順番に1から21までの番号をつけた。また、明らかな誤字については訂正し、訂正した箇所には下線を引き、直後の（ ）内に元の誤字を記した。その他にも、意味の解りにくい文章があったが、誤字以外の誤りについては一切訂正していない。

A-1：1：平塚らいてうの行動は男女差別撤廃への原点であるといえるだろう。男女に参政権、選挙権の不平等があっても、それを当り前のように受けとめたり、あるいは不平等を感じても実際行動にうつす人がいなかったりするなかで、青鞥社や新婦人協会を設立したなんて、素晴らしいことだと思う。私も彼女のような行動的な人になりたいと思う。

A-2：2：女性の地位が低くまだ確立されていなかった時代に、女性の独立を呼びかけるのは、当時としてはとても奇抜なことだったと思う。しかし、このような運動が徐々に広がり今日の男女平等の社会につながっているのだと思う。だから、私たちは今後も女性の地位のあり方について考え続け、その地位の向上を目指していくべきだと思う。

A-3：3：確かに雇用条件や家庭の問題などによって女性の社会進出が完全にはなされておらず、また能力的にはもっと進出のできる力があると思うので、おおむね著者の意見に賛成である。しかし、著者の文章からは女性は太陽であるというような、女性のみを誇大（古代）に尊重するような表現が見られると思う。

B：4：太陽と月というものに女性の生き方を表現したことがすごい。たしかに数十年前まで、女性の地位は男の裏方といったかんで、女性自身が評価されることはなかったから、この通り“月”であって、“太陽”ではなかったと思う。しかし、女性が太陽であるならば、男性は一体何になるのか、と思う。女性を自由へと解放するという主張はすばら

しいけど、男性への敬意が多少見失われているようにも見える。男女が互いに、互いの長所を認め合える、対等な立場を表現することも大切だったように思う。

C： 5：私は著者の考え方に賛成である。女性が男性に頼って生きなくてはいけないというのはおかしいと思う。女性であれ男性であれ一人の人間としては平等なはずで、女性を劣っていると考えるのは間違いだと思う。

D： 6：一口に女性の解放と言っても難しいと思う。女性に男性と同等の扱いがなされればそれが解放かと言えば、それは違うように思う。男女の体のつくりの差異などの違いからうまれた「男女差別」もあるのだし、逆に男性には門戸のひらかれていない職業だってあるはずだ。「自らに潜む潜在能力を十二分に発揮させたい」というのは男女共通、誰しもが願うところだろう。「差別されている女性」ということに甘んじてただ男女平等を叫ぶだけでは単に同情をさそうことにしかならず、能力を発揮することはできないと思う。

読んでいただけるとわかると思うのだが、B～Dに分類される意見は、分類の基準からだいたい想像できるものであり、それらの主張はだいたい似通っている。BとDに分類した意見は、「女性解放」や「女権拡張」という主張や運動に対する疑問を表している。一方、Cに分類した意見は、そうした主張や運動が必要であると主張している。しかし、全体の62.4%をしめたAに分類された意見は、内容的にかなりばらつきがでた。具体的には、上で紹介した意見に代表されるような3つの傾向を示している。1つ(A-1)は、1番のような雷鳥礼賛とでもいうべき主張であるが、これは13あった。2つめ(A-2)は、雷鳥の生きた時代を考慮して評価している2番のような意見である。このような意見が一番多く34あった。これは、Aグループの半分であり、全体の3分の1でもある。最後(A-3)は、3番のような意見であり、雷鳥らの主張や運動の必要性は認めつつ、女性をほめすぎではないのか?という疑問も示している。

この分類結果からなにを読み取るかは難しいところであるが、私はBに分類できる意見が少なかったことと、A-3に分類できる意見が15あったことに注目したい。というのは、A-3に分類できる意見は、雷鳥らの活動や女性運動が歴史上必要であったことを認めつつも、雷鳥のエッセイやその他の人々の過激な主張に対しては否定的なのである。つまり、「歴史的に評価する」という視座を持つことによって、雷鳥らを評価しているが、実際の主張はDに分類された意見に近いのである。一方、Dは「歴史的に評価する」という視座にたたないことにより、より激しく女性運動やジェンダーフリーを批判している。また、Bに分類された意見は、時代の状況に理解を示したうえで、雷鳥のエッセイに否定的であるが、わずかに2つしかなかった。さらに、今回の分類ではBに入れたが、厳密には「歴史的に評価する」という視座にたっているとはまでは言えない解答であった。このことから、「歴史的に評価する」という視座に、生徒の考えを中和する作用があることが推測される。今回の場合は、生徒はテスト

の採点を気にして、雷鳥のエッセイの中に評価すべき点を探してみたのかもしれない。しかし、どこか評価できる点がないかと考えながらある考えに接する姿勢には、その考えを理解する可能性が秘められているといえるだろう。「歴史的に評価する」という視座を養っていくことは、さまざまな考え方を評価するための手段を養うことにもなり、さまざまな思想を受け止める能力の育成につながることで期待できると改めて感じた。

また、総数自体は予想したよりも少なかったのだが、「現在は女性差別がない」あるいは「現在は女性差別が減った」とはっきり述べた意見の分布結果も興味深かった。そのような意見はBとDに偏るのではないかと推測したが、実際には、Dには1つしかなかった。そして、A-1に8つ、A-3に2つ分類されていた。BとCには見られなかった。たとえば、2番の意見に見られるように、むしろ現在につながる運動だったと「歴史的に評価する」ことにより、雷鳥らの運動を肯定的にとらえる意見の中に、「現在は女性差別がない」あるいは「現在は女性差別が減った」と述べた意見が多かった。「現在は女性差別がない」という認識には問題があるが、この事実からも、「歴史的に評価する」という視座にたつことで、現状認識だけによって雷鳥の主張を批判せず、その考えを受けとめることができていることがわかる。「歴史的に評価する」という視座を持つことが、より多くの考えを受けとめる可能性につながることを推測されるのである。同時に、生徒がジェンダーフリーを否定する根拠を、既に男女平等が成立しているという誤解に求めているわけではないことも解るだろう。

ここまでの分析にはあまり関係ないけれども、興味深い意見がいくつかあった。その1つを紹介したい。

7：A-1：たしかに女性が自らの才能を發揮できない環境において、この考え方は非常に画期的（活氣的）であるように感じる。女性が本能的に向いている仕事（家事、育児）などから解放するという意味ではない所がとても共感できる。やはり家事は分担することはあってもすべて男にまかしたり、放棄するのは疑う部分がある。本来の役割をしつつ、自分の才能、やりたい事をやれるというのは女性にとっての理想である気がする。

この意見は、雷鳥のエッセイを非常に肯定的にとらえている。しかし、ジェンダーフリー運動には否定的である。出題された史料だけから、雷鳥の主張の核心が母性保護にあったことを見抜いたとしたら、この生徒の読解力は非常に高いと言えるだろう。しかし同時に、他の意見が、雷鳥のエッセイを読みつつも、雷鳥の思想と現在のジェンダーフリーなどを混同して批評している意見であると、改めて感じさせる意見でもある。

b. 第2段階：お互いの感想を読んで

第2段階の調査には、100名の生徒が参加した。この中には第1段階の調査の分析対象にならなかったが、第2段階の調査の分析対象になった生徒が9名含まれている。

第1段階の調査を終えて、予想以上にさまざまな意見が出たことに驚き、この意見をぜひ生徒に還元

したいと考えた。そこで、全ての解答をプリントして、生徒に配布した。その際、解答の匿名性を保つことには、特に注意した。その後、全ての意見の中から、賛成または共感できるものを3つ以上、支持できない意見をできれば1つ以上選び、それぞれの理由を書かせた⁽⁵⁾。これが、第2段階の調査である。この調査を行った目的の1つは、生徒が他の生徒の意見に接した時に、どのように受け止めるのを見ることである。たとえば、自分が納得できない意見について根拠を示して批判することができるのか、あるいは自分とは異なる主張も論理的に理解しようとするのか、などを観察することである。

もう1つの目的は、生徒の本音を知ることである。実は、第1段階の調査結果を読んでいて、論調の強弱の差はあっても、ジェンダーフリーをめぐる運動や教育に対する反感を表明している意見が多いことに驚いた。私自身も高校生の頃に女性の社会進出をめぐる問題について学習した際、「女性は差別されているから戦わなくてはならない」というような論調にはとまどいを感じた記憶がある。そのため、そのような困惑を示す意見が出ることは予想していたが、既に示したように、はっきりと雷鳥の主張やジェンダーフリーを否定するような意見が複数出たことには驚いた。そして、いったい、どの程度の生徒がジェンダーフリーを目指す運動や教育に対する反感を持っているのかを確認したくなったのである。生徒にとって権威あるテキストを読ませるのではなく、同級生達の意見を読ませて、それを批評するというスタイルをとることにより、「このように考えなくてはならない。」という制約から外れ、より自由な考えを書くことが可能になると考え、このような調査方法を採用した。以下では、上記の2つの目的に沿って、調査の結果について述べたい。なお、第1段階の調査で扱った生徒の「意見」と区別するため、第2段階の調査で分析する生徒の意見を、便宜上「コメント」と表記した。

1つ目の目的については、かなりの成果が得られたと考えている。1つ以上の意見について、根拠を示しつつ批判した生徒は73名いた。批判的コメントを書かなかった生徒も含めて、ほとんどの生徒は、他の生徒の意見をよく理解した上で、自分のコメントを述べており、全体的な生徒の能力の高さを感じた。なお、批判的コメントを書かなかった27名の生徒は、クラス別に数えると12名、8名、7名であった。他の2つのクラスよりも多くの生徒が批判的コメントを書かなかったクラスは、生徒同士の仲が特に良く、非常に明るいクラスであった。その分、日頃の授業の際、緊張感にかけることもあったが、そうしたクラスの風土が反映されているように思われる。

2つ目の目的については、数量から分析していきたい。まず、共感的コメントは60の意見に対して合計387、批判的コメントは32の意見に対して合計108あった⁽⁶⁾。ここでは、第1段階の調査で述べられた意見の中から、多くの生徒が共感した意見、多くの生徒が批判した意見を紹介したい。共感された意見については、10人以上が共感的コメントを書いたものを、批判された意見については4人以上が批判的コメントを書いたものをあげた。番号の後ろのアルファベットは、第1段階の分析に利用したA～Dのグループのどれに分類しているかを表している。また、末尾の（ ）内の数字はその意見にコメントした生徒の数を表している。

【共感された意見】

6：D：＜第2章のaで紹介済み＞ (33)

8：D：最近、“ジェンダーフリー”という声をよく聞くけれど、私はまず“ジェンダー”とか“男、女”という既念を取りはずして、もっと一個人の人間を見つめるような世の中が望ましいと思う。人それぞれ身体的なハンディキャップや持っている能力が違うのは当然で、私達は互いにそれを認め合って、思いやりを持って行動すべきだ。 (25)

9：D：女性の社会進出という当然尊重されるべき考え方を打ち出したこと、それ自体は立派であるが、社会⇔家という単純な二項対立的な見方には疑問を感じる。家において、日々繰り返す生活のマネジメントを行なうことが、社会的後退とでも言いたいのであろうか？女性が担ってきた女性にしか行なえない微妙なバランス感覚と季節感覚に基づいて行なう仕事に、もっと自信を持つことやその仕事がいかに人間の素生活に根ざした重要な仕事であるかを男性に認めさせることも大切なのではないか。 (20)

10：B：女だから輝くべきとか、男だからどうのっていう考え方には賛成できない。人間みんなに自分の才能を発揮し世間に知らしめる場が提供されるべきだ。だが、この時代の女性にはその“場”がなかったのも事実なのだろう。『わが輩は猫である』にも『…女にはわからない』『女が口を出すことではない』『女だから学がない』など言われて心外であった。それを当然として、いつまでも女の上にあぐらをかいているような男どもやその立場に甘んじている女たちが、自立し才能を発揮するべく息巻く女たちのじゃまをしてきたのだろう。この時代に生まれなくて良かった。時代の流れ、常しきってこれほど怖いものはないかもしれない。 (19)

11：D：男性を太陽とし、女性を月とする対比の仕方は男女間の対立を生むだけで好ましくない表現だと思う。潜在能力というものが、未だ発揮されていない女性たちという表現も、排他的な価値観で見苦しい。助け合うために生まれた性別であるのに、その性別間に溝を作る様な書き方をしているのが私はすごく嫌だと思う。こういう考え方を持った女性とは関わり合いにならないのが一番だと思った。ただ、こういった人々がいたからこそ女性は主権を持つことができた訳で、がんばった人達はすごいかもしれない。 (17)

12：C：確かに、女性の社会的地位は徐々に向上しつつあるものの、まだ平等とまではいかないと思う。特に、多くの日本企業において1度産休で会社を辞める(止める)と復帰しづらい現状がある。今、ジェンダー問題が注目されているが、私は女性を差別することは、男性の差別にもつながると思う。女性とは、男性とはこうあるべきだと規定してしまうと女性だけでなく、男性もその像につながれてしまうからだ。結局「女性の解放」とは性別の差にしばられない人間の解放でもあると思う。 (16)

13：D：現在では女性は別に社会において差別されているようには思えない。この時代の女性にとっ

では「ジェンダーフリー」は大事だと思うが、今の女性にとってはそこまで大事ではないと思う。私にはお茶大の教育はやり過ぎに感じ、現代にとって「ジェンダーフリー」は女性にではなく、男性に徹底させる考え方なのではないかと思う。 (14)

14：D：女性の自由解放というのは、男性と女性が同等に扱われることを求めるものだ。しかし、現在でも男女が平等に扱われているとはいえない。ジェンダーなどの性差による社会的役割分担は根強い。いかなる職業であれ、性(姓)に関わらず、尊重されるべきだと思うが、生物学的性差によって職の向き不向きはあると思うので、実質的役割分担を五分五分にするのではなく、あらゆる人の生き方を容認できる精神の育成が必要だ。 (12)

15：D：皆が皆、自分の力を発揮して活躍しようとするのはどうかと思う。何も押し殺す必要はないが、表に立つ人間は少ないものである。私は個々の人が自分が切に願うことを実現、又は実現する努力ができる環境にいれば自由になるのでは、と思う。幸せを感じることができれば、不自由だということは決してない。 (12)

16：A—2：私は著者の考え方は間違っていないと思う。日本社会において、女性は確実に女性であることだけで人権を制限されてくることが多かったから、そしてそれを、女性自身が“当然のこと”として思っていることも多かったと思うから、女性が“自覚”するのは大切だと思う。 (12)

4：B：<第2章のaで紹介済み> (11)

17：A—3：女性が「女性である」ことにしばられずに、自分の能力を使ってやりたいことをすることができる、というのは、守らなければならない権利だと私も思う。「原始、女性は太陽であった」というのは印象深い言葉だ。女性は自身の力で活動できるのだということ。「太陽」という恒星の名を出すことで印象づけているように思う。今の私達の時代では、女性は望めば「太陽」になれる。だが、女性の権利を主張することで逆に女性が女性としてしぼりつけられている、というような問題も、今新たに出てきていると思う。 (10)

18：A—3：今まで抑圧され軽んぜられることが当然であった女性自らがそれに異議を唱え、こうして行動に出たことはとてもすごいと思う。しかし、「女性は実に太陽であった」何の根拠でそう言っているのか。ただ意味もなく比喻として使っているのかもしれないが、しかし、この表現を認めると、今度は逆に男を軽んじることにもなるのではないか。せっかくの才覚を女というだけで埋もれてしまうのは実においしい、口惜しいので彼女の運動は評価に値するが、しかし手放してただすごいというわけにもいかないと思った。 (10)

【批判された意見】

11：D：＜第2章のb【共感された意見】で紹介済み＞（15）

19：A-3：確かに近世、近代と女性の地位は低く、しいたげられてきた。そのせいで、本来の力を発揮できずに終わった女性も数多いだろう。もちろん、それは社会にとってもいづれ害となることであるし、私も筆者の意見に賛成である。けれど、本当の自由解放とはわざわざとりあげなくても自然に男女の平等が成り立つことだと思う。（11）

15：D：＜第2章のb【共感された意見】で紹介済み＞（9）

20：D：女性の地位が低い、低いから上げろと言いつぎることではかえって男女平等の社会から遠くなっていく（7）

13：D：＜第2章のb【共感された意見】で紹介済み＞（6）

9：D：＜第2章のb【共感された意見】で紹介済み＞（5）

21：A：今、女性は月で、他に依って生きて他の光によって輝くというのはいまい表現だと思うけれど、「女性が太陽だった」っていうのは、どうしてでしょう？もしかして子供を産むことができるから？だとしたら「隠されて仕舞った我が太陽を今や取り戻さねば…」というのはおかしいですね。よくわかりません。でも最後の「偉大なる潜在能力を十二分に発揮させること」が自由解放っていうのはよくわかるし、なんかかっこいいなあと思います。（4）

10：B：＜第2章のb【共感された意見】で紹介済み＞（4）

以上を見ると、共感された意見も、批判された意見も、その多くがDグループ及びBグループに属していることがわかる。また、共感された意見と批判された意見が重なっていることもわかるだろう。ここにあげた批判が集中した8つの意見のうち、5つは共感が集中した意見でもあった。紙幅の関係上ここにはあげていないが、他にも批判と共感の両方を得た意見が3つあった。この8つの意見のうち5つがDに、2つがBに、1つはA-3に属している。これは、ジェンダーフリーに関する反発意見に、多くの生徒が関心を示したことを表している。

共感的なコメントだけについて見てみると、全体の4.1%がA-1グループに属する意見に、24.3%がA-2グループに属する意見に、16.5%がA-3グループに属する意見に、7.8%がBグループに属する意見に、12.4%がCグループに属する意見に、34.9%がDグループに属する意見にそれぞれ共感を示していた。つまり全体のおよそ6割のコメントは、ジェンダーフリーに疑問や反発を表明した意見に共感的であったのである。今回の調査では生徒は複数の意見に対してコメントを述べているが、反ジェンダーフリー的な意見にはまったく共感を示さずむしろ批判的であった生徒は、全体の7%しかいなかった。そして、これらの生徒が第1段階の調査で書いた意見は、A-1グループ、A-2グループ、Cグループに属していた。一方、コメント全体の6割をしめたジェンダーフリーに疑問や反発を示した意見に共感的なコメントを1つ以上書いた生徒は全体の93%にのぼった。これは、ほとんどの生徒が雷

鳥らの運動やジェンダーフリーについて肯定的であった第1段階の調査とは矛盾する結果である。

では、Dグループに属する意見についての共感的なコメントとはどのようなものであったのだろうか。典型的なものをいくつか紹介したい。ここでは、6番と9番に対するコメントを紹介する。紹介したコメントはそれぞれ典型的な部分を一部抜き出してある。

- 6：・男女の身体づくりの違いから生まれた男女間の区別があることは、男女差別ではないし女性差別と叫びすぎることは反対に男性を差別していると思う。
- ・「女性の解放」を女性だけのことにとらえず男女共通の問題としている点に共感した。
 - ・ただ男女平等を叫ぶだけでは、同情を誘うだけでダメであるという点に共感した。
- 9：・女性の権利も大切だけど、「男らしさ」「女らしさ」も大切なのではないかと、改めて考えた。女性にしかできない仕事をもっと評価すべきという点に共感した。
- ・女性は「家事」という仕事にもっと誇りを持つべきであるし、家事をするのか社会に出て働くのかを選択できる社会が望ましい。
 - ・私も生物学的に女性に向いている仕事というものがあると思う。

これらのコメントを見てもわかるように、1つの意見に対してさまざまなコメントがよせられている。また、他の意見に対するコメントの中にも、「こういう考え方もあるのかと気づいた」、「なるほどと思わされた」などのゆるやかな共感も多く見られた。それゆえ、全体の93%が反ジェンダーフリー的思想をもっていると考えすることは、もちろん事実誤認であろう。それは、全体の6割以上が反ジェンダーフリー的な意見に批判的なコメントをしている事実によって証明されている⁽⁷⁾。ただ、生徒が、ジェンダーとは何か、なぜジェンダーフリーという考え方が成立したのか、なぜジェンダーフリーが必要なのかをしっかりと理解していないため、目新しいと思った意見に惑わされる傾向があることがはっきりしたといえる。さらに、「生物学的差異」と「家事や育児の価値」が生徒達の反ジェンダーフリーのキーワードになっていることにも注目したい。

一方、批判されず共感のみを得た意見もいくつかあった。上に挙げた多くの生徒の共感的コメントを得た13の意見の中で、批判的コメントが1つもなかった意見は、8番、13番、14番、16番、17番の5つである。この5つの意見はA、C、Dのグループに散らばっている。そのため、雷鳥以来の女性運動やジェンダーフリーという考え方に対する評価にも、かなりの差が見られる。ただ、どのような世の中が望ましいのかについて、自分の考えを具体的に述べている点が、共通していると思う。さらに、この5つの意見が提示する世の中のあるべき姿は、「個」を大切にする、差別のない世の中であることも共通している。それでは、この5つの意見のどの部分に多くの生徒が共感したのであろうか？これらの意見に寄せられたコメントを、一部紹介したい。

- 8：・ 一人の自由を考えていける世の中がのぞましいという点に共感
- ・ 「ジェンダーフリー」や「女性の権利」を強調する前に、一人一人の「個」を大切にすることが大事だと私も思う。
- 12：・ 「女性の解放」とは性別にとらわれないことだという部分に共感した。性別にとらわれず、個人を見つめる世の中になってほしい。
- ・ 女性差別は男性差別につながるという点に納得。
- 14：・ 生物学的な差異をふまえて、役割分担を考えることは必要だと思う。
- ・ 生物学的な差異があるのだから、どこにでも女性の進出を求めるのはたしかにおかしい。
 - ・ あらゆる人の生き方を容認する精神の育成は必要である。
- 16：・ 雷鳥の訴えは差別を自覚していない女性にも影響を与えただろう。雷鳥の主張には賛成できないが、その点は評価すべきだと気づいた。
- ・ 差別をなくすためにはまず自覚することが大切という点に納得。
- 17：・ ジェンダーと言い過ぎている風潮があると思う。女性差別を主張することで、女性に縛り付けられているという点は、女性運動の現状を良く表していると思う。

以上を見ると、共感的コメントの内容は、先に紹介した、共感も批判も多かった意見に対する共感的コメントとほぼ同じであることがわかる。ここにも、ジェンダーフリーに対するそこはかたない反感が見られる。そして、その根拠は多くの場合「生物学的差異」に求められているのである。

それでは、Dグループに属する意見に対する批判的なコメントの内容はどうであろうか。多くの批判と共感を集めた11番と15番、そして9番に対する批判的コメントを紹介したい。

- 11：・ 人には思想の自由があるのだから、見苦しいとか係わり合いにならないのが一番とかは言い過ぎだ。
- ・ 自分の考えが正しく他人の考えに耳を貸さないような態度は、差別的だ。
- 15：・ 活躍の場所に差があるとしても、一人一人が個性を活かすのは良いことだと思う。自分の力を発揮しようとするのはどうかと思うというのはおかしい。
- ・ 差別を撤廃しようとするのは幸せを感じられないからだろうから、この主張は議論を取り違えている。
 - ・ ほかの価値観を知らず、閉ざされた中で感じる幸せは本当の幸せなのか？
- 9：・ 家事などが生活のために重要なのは当然だが、なぜそれが女性にしか行えず、男性にその価値を認めさせなくてはいけないのか理解できない。
- ・ 女性が行ってきた家事を評価することが必要だとしても、同時に女性の社会的地位を向上させることも、女性にとっても社会にとっても必要である。

これらのコメントからは、差別が存在したり自己実現が抑制されたりする世の中であってはならないという意識がうかがえる。また、他者の意見を全否定するような主張は、批判されやすいこともわかる。これは、かなりの生徒が差別というものの本質を見極めていることを示していると思う。しかし、たとえば11番については、全体的には批判しながらも、「助け合うために生まれた性別であるのに、その性別間に溝を作るような書き方をしているのが私はすごく嫌だ」という部分には共感を示しているコメントが多かった。11番の意見が、共感と批判の両方を集めた要因がここにみられる。つまり、生徒には強硬な自己主張への反感があると同時に、ジェンダーフリーへのそこはかたない反感があるのである。この点に、生徒の反ジェンダーフリーを読み解く、1つの鍵があるように思われる。

最後に、批判されたがあまり支持されなかった意見として、19番がある。この意見については、「たしかに自然に成り立てばよいだろうけれど、自然に成り立たないから平等を求める運動が必要なのだ。」とコメントされていた。

3. 今後の課題 高校日本史におけるジェンダーフリー教育の課題

本章では、特に第2章の分析結果を踏まえて、高校の日本史でジェンダーフリーを扱う際の内容や留意点について考えてみたい。

まず、ここまでの分析から見えてきた本校の生徒の現状をまとめたい。ジェンダーフリーを求めるために女性が果たす役割を重視している生徒がいる一方で、反ジェンダーフリー意識を持っている生徒が同数程度いることがわかった。しかし、大多数の生徒は、そうしたはっきりした考えを持たずにいて、他の生徒の考えに影響されやすい状態にあることもわかった。さらに、そうしたどちらにもつけない生徒の多くは、ジェンダーフリーの必要性をなんとなく理解しつつも、そこはかたない反ジェンダーフリー感覚を持っていることもわかった。

どうして、大多数の生徒がはっきりした考えを持たずにいるのだろうか？この問題は「どうしてジェンダーフリーが必要であるという考えに自信をもてずにいるのだろうか？」という疑問におきかえることもできると思う。今回調査対象とした生徒は1985年度生まれの生徒であり、ジェンダーフリー教育が学校教育に導入されるようになってから、学校教育を受けた生徒たちである。そして、小学校・中学校・高等学校とたびたびジェンダーフリーについて学んできた世代である。その生徒たちがどうしてはっきりした考えを持たずにいるのだろうか？今回の調査対象となった生徒たちに対しては、この疑問を確認するだけの時間がなかった。しかし、授業の際に生徒たちに直接質問したところ「ジェンダーにはもう飽きた」、「ジェンダーより大事なことがあると思う」、「メディアなどでジェンダーフリーを主張する女性に共感できない」という理由が、その答えとしてあげられた。これらの理由はジェンダーフリー教育の在り方、さらには意義自体にも疑問を投げかけるものであるといえるだろう。今回の調査結果が一般的な傾向であるかどうかについて、また、その理由が今回の生徒と同じであるかどうかについては、今後、確認していく必要があると考えている。

生徒から挙げられた理由とは別に、生徒にジェンダーやジェンダーフリーに関する知識が不足しているという要因も考えられる。このことは、第1章の分析によって示されている。また、第2章で分析した生徒の意見やコメントには「ジェンダーフリーより個を見つめることが大切」という反ジェンダーフリーの論理が多く見られた。これも、生徒の理解不足を、非常に良く示している。また、「生物学的差異により向いている職業があるはずで、それは差別ではない」という反ジェンダーフリーの論理も多かったが、これもジェンダーという考え方の基本を理解していないがために出てくる主張であろう。

しかし、2章までの分析からは、生徒たちが差別を悪いものにとらえ、個性や思想の自由など「個」を大事にしなくてはいけないととらえていることがわかった。それは、強硬な主張に対する反発としても表現されていた。これは、本校で行ってきたジェンダーフリー教育の成果であると、私は考えている。もちろん、異文化理解などのその他の特別教育プログラムや通常の教科指導の成果でもあるが、ジェンダーフリー教育を受けた生徒は、自分も他者もお互いの考えや生き方を尊重しあわなくてはならないということを理解し、この考えには納得している様子がうかがえるのである。このことから、ジェンダーフリー教育の究極の目的は果たされていると評価できるだろう。

ではなぜ、そうした生徒たちが反ジェンダーフリー意識を示すのであろうか。この要因として、生徒たちが強硬な主張に対して反発を抱く傾向にあることがあげられるだろう。先に述べたように、「メディアなどでジェンダーフリーを主張する女性に共感できない」と言う生徒がいた。その様に主張する生徒が、「彼女たちは人の意見を聞いていない」という理由をあげると、多くの生徒がその生徒に同意を示した。このことから、ジェンダーフリーが「疑う余地のない正しい価値」として示されることに反発しているのだと考えられる。言い換えるならば、「ジェンダーフリーにより生き方を強制されている」ような感覚から生じた反発なのではないだろうか。これは、第1段階の調査で出された9番の意見や、第2段階の調査でそれに共感を示した「家事をするのも社会に出るのも、選択できることが必要なものであり、必ずしも社会にでることが必要なのではない」というようなコメントにより、裏付けられるだろう。

今回の調査結果から、高校の日本史でジェンダーフリーを扱うとしたら、まず、生徒たちがすでにジェンダーフリーについて学んできたこと、しかし正確な知識は定着していないことを踏まえる必要があることがわかった。つまり、ジェンダーフリーという考え方が、重視されるようになったという現状について扱っても、大きな効果は期待できないだろうことがわかった。この点について繰り返し教えるのではなく、どうしてそのような考え方が必要になってきたのかについて考えさせる授業が望ましいだろう。それ以上に、ジェンダーとは何か、どのような歴史的状況の中で作られてきたものなのかを、しっかりと理解させていくことが必要であると思う。ジェンダーは作られたものであることは言うまでもないという感覚は、生徒には通用しない。また、ジェンダーが作られてくる際に、「生物学的差異」が利用されたことについても、きちんとした説明をする必要があるとわかった。

具体的には、明治維新後の西洋化、近代化の過程において、作られてきた日本のジェンダーを意識さ

せていくことが必要であろう。2003年度の「日本史A」の授業では、明治初期の天皇権威の創出過程を扱う際に、明治天皇一家の肖像を利用した⁽⁸⁾。主に、天皇の肖像のみを扱って、天皇の可視化がなぜ必要であったのかについて考えたが、今後は天皇一家の肖像をより有効に利用して、ジェンダー創出の過程について考えていく授業が有効であるように思う。さらに、明治期に創出されたジェンダーと現代のジェンダーが異なっていることを理解させる必要があるだろう。明治期のジェンダーが解体したとしても、それがそのままジェンダーフリーの完成とはならないということを理解しなくては、「現代にはジェンダーフリーは必要ない」という反ジェンダーフリーの論理を解消させられない。そのためには、戦後の女性について、積極的に取りあげていく必要があることを痛感した。憲法などで規定された女性について扱うだけではなく、社会の中で女性がどのように生きたのかを考えさせる教材を作成していくことが、私にとって今後の大きな課題であると考えている。また、ジェンダー形成や変化の背景には、政治や経済の動向と関係があることを理解させることが、最も必要だろう。そうでなくては、「家事をすることを選択するのは女性の自由意志だ。」というような考え方に影響を与えることは難しいように思われる。

本稿では触れなかったが、歴史上、女性がどのような社会的地位をもっていたのか、あるいは与えられていたのか、ということの説明しようとした意見がいくつかあった。たとえば、卑弥呼や中世の女性の相続権などから論じようとしているのである。しかし、残念ながら、それらの意見は根拠としている知識が誤っており、説得力を欠いていた。つまり、生徒が歴史における「女性」についての知識をほとんど持っていないことが明らかになった。あるいは、女性が歴史の中で果たしてきた役割に関する知識があっても、それと現代のジェンダーフリーとを結びつけて考えていない可能性も考えられる。この事実から考えると、日本史の授業の中で、それぞれの時代における「女性」あるいは「性」に関する基本的な知識を与えていくだけでも、学校全体でジェンダーフリー教育に取り組んでいる本校の場合は、大きな成果をあげることが期待できるかもしれない。

おわりに

学校教育の場では、入学試験がその代表的な例であるが、評価は成績によることが多く、その成績はテストの点数で機械的につけられることが多く、そこに男女差別の入り込む余地は少ない。つまり、機会における男女平等、能力主義が、ある程度確立しているといえるのである。それゆえ、実際にはさまざまな場面でジェンダーによる差別が存在しているにもかかわらず、生徒がそれを自分にとっての大きな不利であると受け止めることは少ないだろう。私自身も、高校生の頃までは、男女差別なんて過去の話だと考えていた。

ジェンダーフリーという考え方が広く知られるようになり、学校教育に取り入れられるようになって、すでにかかなりの時間が過ぎた。すでに、ジェンダーフリーという考え方があることを教えるだけでなく、さらに洗練された教育方法が求められる段階に達しているのではないかと思う。ジェンダーを

身につけるように自然にジェンダーフリーを身につけられるような、発達段階に応じた教育手法を考えていかななくてはいけないのではないだろうか。

最後に、卒業間近の忙しい時期であるにもかかわらず、今回の調査に協力し、多くの示唆を与えてくれた、2003年度卒業生たちには、感謝を表したい。

註

- (1) 2002年度入学生からは新カリキュラムが適用され、必修日本史Aは2年次での開講となる。
- (2) 2003年度2学期期末テストからの引用である。この問題では、吉野作造の「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」の一説と「水平社宣言」とを読ませた。史料の出典はいずれも山川出版社の『詳説日本史史料集 増補改訂版』である。
- (3) 本稿脱稿後、2004年度の2・3年生を対象に行った日本史学力調査では、『『青鞥』創刊号のエッセイが有名な、女性解放運動を行った人物』を答えなさいという設問に対して、「平塚雷鳥（らいてう）」と答えられた生徒は、全体のほぼ50%であった。中学校までの学習だけでは、必ずしもなじみぶかい人物とはいえないことがわかった。
- (4) 既に述べたように、極端に短い解答や途中で終わっている解答は分析の対象からはずしたが、生徒には配布した。
- (5) 第1章で述べたように、共感できるものを3つ、印象に残ったものを2つ書くことのできるアンケート用紙を配布したが、印象に残ったものについては、できるだけ反発を感じたもの、明らかに間違っていると感じたものを批判するようにと指示した。
- (6) 第1段階の調査の分析からはずしたが、生徒に配布したプリントには載せた意見に対する共感的コメントが10、批判的コメントが4あった。この14のコメントについては、分析の対象としていない。
- (7) 批判的コメントが寄せられた意見は、A-1に3.7%、A-2に17.6%、A-3に20.3%、Bに5.6%、Cに11.1%、Dに41.7%属していた。
- (8) 多木浩二『天皇の肖像』岩波新書（1988）、若桑みどり『皇后の肖像』筑摩書房（2002）